

## 平和構築と自衛権をどう考えるのか —ロシアによるウクライナ侵略をうけて—

二〇二二年十一月四日、第十一回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。今回のテーマは、「平和構築と自衛権をどう考えるのか—ロシアによるウクライナ侵略をうけて—」（「ウクライナ侵略」は、首相官邸HPにて使用される表記にあわせました）です。

浄土真宗本願寺派において、「平和」に関する取り組みは重要な活動であり続けています。宗門が戦後七十年を機縁として作成した「平和に関する論点整理」（二〇一五）は、「隣国が武力で日本に攻撃してきたら、自衛権に基づいて反撃しないのか？」という「素朴な問い」から始まっています。

自衛のための武力行使は、二〇二二年二月二十四日、突如としてロシアが武力を用いて一方的にウクライナへ侵略し、核兵器の使用が論じられるほどに戦闘は激化し、長期化の様相も呈する中で、エネルギー・経済・食糧などさまざまな分野に影響が拡大し続けているという現実からも、重要な問いであることがわかります。こうした「争いの現実」に向きあい、宗門として、阿弥陀如来のみ教えをいただくものとして「平和」のために一体何ができ、何をすべきなのかを考えなければなりません。

第十一回宗門教学会議では、委員として龍谷大学教授の清水耕介氏、東京外国語大学教授の伊勢崎賢治氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長（所長職務代行）の満井秀城が務めました。

今号は全体討議について報告いたします。

宗門教学会議は、現代社会の諸課題に対して専門的見地を有する有識者を招聘し多角的・学際的な議論を行っています。その際になされる有識者の意見・提言は宗派の見解を代表するものではなく、宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、「自他共に心豊かに生きることのできる社会」の実現のためいかなる役割を果たしうるかを探るための参考としています。

一・「戦争・紛争」への実感

○満井 ただ今から全体討議を行います。まずは、清水先生のご発題について、

伊勢崎先生から何かご質問、ご意見などあれば頂戴したく存じます。

○伊勢崎 まず戦時における宗教者、教義の在り方というのは、私にとって新しい視点として問題にしたいと思います。



やはり紛争解決、対話の促進における宗教者の役割と、一方で戦時において宗教者が戦争をおおるといふ側面をともに考える必要があると思います。

また、日本人は、憲法九条があるのに、市民動員に対して何も抵抗がない。しかし市民動員はやってはいけないことです。

○清水 絶対そうだと思います。ある意味、国際政治学会に限らないと思います

が、戦争について研究していく人たちの中で、やはり実感が薄れていつている部分はすごくあると思います。やはり現場に立つことの重要性は非常に強く感じています。

○伊勢崎 そうですね。「憂慮する歴史家の会」というのが立ち上がりました。本当に名誉教授クラスのロシア、中国、ウクライナ、ユーラシアの専門家たちがとにかく停戦させないといけない、と立

清水耕介氏

【略歴】

一九六五年生まれ。西南学院大学経済学部卒業、経済学研究科修士課程修了。ニュージーランド国立ヴィクトリア大学政治学・国際関係学大学院博士課程修了。Ph.D. in International Relations 関西外国語大学国際言語学部講師・助教授を歴任。現在、龍谷大学国際学部教授。専門は、国際政治経済学、国際関係論。著作に、『市民派のための国際政治経済学―多様性と緑の社会の可能性』（社会評論社、二〇〇二年）、『テキスト国際政治経済学―多様な視点から「世界」を読む』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）、『グローバル権力とホモソーシャルティ―暴力と文化の国際政治経済学』（御茶の水書房、二〇〇六年）、『紛争解決暴力と非暴力』（長崎暢子と共編著、ミネルヴァ書房、二〇一〇年）、『寛容と暴力―国際関係における自由主義』（ナカニシヤ出版、二〇一三年）、『批判的安全保障論』（法律文化社、二〇二二年、分担執筆）など。

ち上がった。

驚いたことに同じ主張が韓国でも起きました。やはり韓国は、朝鮮戦争が今に続く休戦に至るまで何十万人も死んでしまった経験がある。その経験があるため、非常に反応が早く、国連総長に対する共同声明とかを出しています。しかし、若い研究者には盾突く人たちがたくさんいる。

○清水 若い研究者から、「それをやってもどうせ止められないでしょう」とか、「それをやって何になるんですか」とか「いなことを聞かれることがあります。結果を今すぐ求める傾向があるのかな」と思っています。しかし、私自身は変な信念があつて、絶対見られていると思つていました。すぐかたちにならなくて、自分の主張が通らなかつたとしても、必ず見ている人がいて、どこかで必ず誰かに届いているはずだと思つています。

## 二、「市民社会」の力

○満井 聴講者の中から、清水先生への質問がございますので、読み上げさせていただきます。今、おっしゃつてくださったように、すぐに結果を求められても困る部分はあるかもしれませんが、市民社会のつながりの中で平和に貢献できるといふ話を具体的にお聞かせいただきたいというものです。

○清水 ありがとうございます。私が描いているのは、イラク戦争のときの話です。イラク戦争のときに当時のブッシュ大統領が、「Crusade」といふ言葉を使いました。十字軍という言葉は非常に危ない言葉で、やはり一斉にアラブ諸国から反発の声が上がつたという話がありました。そのときに、その反発が過熱せずにかつた理由の一つに、CNNとかアルジャジーラを通して西洋諸国や日本など世界各地で数万人から数百万人単位のデモが起きていることがアラブ諸国に流

れることで、多くの人が反対しているということが間接的にはあるが伝わつた。それは非常に大きなことで、第三次世界大戦に発展しないようなかたちで影響したという研究報告もありました。

私は、行動は必ず何らかのかたちで見られていて、人の行動に無駄なものはないと思ひます。だから、直接的に結果につながらなかつたとしても、イラク戦争に反対する人たちが百万人単位でプロテストをやつても、結局イラク戦争は止まらなかつたと言われることがあります。見方を変えれば、第三次世界大戦を止めたという解釈は可能だと思ひます。私たちは常に何かをして、すぐ答えを求めて、それがうまくいったか、いかなかったかという判断をしてしまひますが、違つたかたちで見るときには市民の力は、非常に大きなものと考えています。

○伊勢崎 例えば、「核兵器禁止条約」が成立したのは、NGOの功績ですから、市民社会は国際条約をつくるまでの力を秘めています。だから、絶対侮れな

と思います。

清水先生にお聞きしたいことがあります。今回の市民動員も含めていわゆるピープルズ・パワーの問題です。ピープルズ・パワーの行き着くところとして銃を取り始めたとき、これに対してはつきりとノーと言える根拠をなかなか言えない部分があるんですが、どう考えられますか。

○清水 ピープルズ・パワーのかたちで武装化していく人たちも、一種、政治の



### 伊勢崎賢治氏

#### 【略歴】

一九五七年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒。早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。インド国立ボンベイ大学大学院博士前期課程修了。国際連合平和維持局ニューヨーク本部主催DDR特別運営委員会日本政府代表、国際連合東ティモール暫定統治機構上級民政官、国際連合シエラレオネ派遣団、国際連合事務総長副特別代表上級顧問兼部長、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授を歴任。NGO・国際連合職員として世界各地の紛争処理や武装解除にあたり、二〇〇三年からは日本政府特別代表としてアフガニスタンの武装解除を担当。現在、東京外国語大学教授。紛争予防・平和構築講座を担当。専門は、国際関係論、平和構築学。著作に、『抑止力神話の先へ』（かもがわ出版、二〇〇〇年、共著）、『武装解除―紛争屋が見た世界』（講談社現代新書、二〇〇四年）、『本当の戦争の話をしよう―世界の「対立」を仕切る―』（朝日出版社、二〇一五年）、『非戦の安全保障―ウクライナ戦争以後の日本の戦略―』（集英社新書、二〇二二年、共著）など。

延長線上に暴力を置くという点から言うと、基本的に国民国家と同じロジックを使っていると思います。やっぱりピープルズ・パワーが持つ危険性は革命と一緒に、革命が結果的に本来に人の幸せのためになったのだろうかという疑問は出てくると思います。私は、トルストイからガンディー、マーティン・ルーサー・キングあたりの非暴力抵抗が、結果的によ

かったと理解しているので、対話をやめてしまうことが、結局、相手側の土俵に乗ってしまうことになる。国民国家のシステムは暴力をベースにしたシステムなので、同じロジックでやる方がいいのかという問い掛けはあり得ると思います。

そう考えると、沖縄の人たちは、あれだけ意見を無視されて、実際状況も全然

よくならないのに暴力には頼らないという強さは、本当に尊敬に値するものだと思います。

### 三、「現場」への発信

○満井 ありがとうございます。それでは、伊勢崎先生のご発題に対して、清水先生から疑問や質問、コメントがあればお願いいたします。

○清水 やはり現場は強いなと思いついていました。私自身が一番知りたいなと思うのは、ゼレンスキー大統領についてどう思われますかということです。

○伊勢崎 先ほどの市民動員の話ですが、あれはゼレンスキー大統領を間接的に批判しています。国のリーダーというのは「国際人道法」にのっとって市民を守ることが役割だからです。

私は、二〇一〇年あたりからタリバンとの停戦交渉の対話の道をつくり始めました。そのときもやはり、タリバンと対

話するというのはどういふことだと抵抗がありました。また、対話するということは、ある程度妥協しなければいけないということですよ。しかし、一番苦しむのは一般市民ですから、われわれが持っている人権という概念は、僕は一ミリも妥協したくない。そうした時、どういふふうに発言したらいいのか。

○清水 私たちは、どうしても「日本人たちは」「中国の人たちは」と、集団で捉えてしまう。しかし、社会って実はそういうふうにはできていなくて、やはり一人ひとりいろいろな人がいて、その中で私たちの仕事というのは一発逆転という話ではなくて、ちよつとずつそこにいる人たちの気持ちに届くような、何かをしていくことだと思います。

だから、結果的に駄目だったとしても、私たちの姿を見てもらうことによつて、何か生まれてくるものがあると思つています。こうしたところが縁起にこだわるころだと思つています。

### 四、仏教と非暴力

○満井 ありがとうございます。ここで質問を投げかけさせていただきます。お釈迦さまには「武器を持ったから恐怖が生じた」というお言葉があり、これは今日の銃社会への警鐘にも通じる非常に重要な指摘だと思つています。そして、このことを基本に、仏教は非武力、非暴力というスタンスをずっと継続してきたわけです。

八年前のクリミア侵攻においては、ウクライナ側がほとんど無防備なために、数日間併合されました。そして、二〇二二年二月にはロシアがウクライナに侵攻し、ウクライナ側も軍備増強を加え、そして、NATO側の支援もあつて、現時点で十カ月以上の間持ちこたえ、あるいは反転攻勢とさえ言われる勢いだということを考えてとき、世間はやはり軍備増強に動くべきだという雰囲気包まれつつあるわけです。仏教教団としては、



非武力、非暴力、非戦平和という理想を貫きたいわけですが、その理想を掲げるだけではなく、理想に近づくためにわれわれはどういう在り方を模索するべきか。世間では軍備増強だという声が多数になりつつある中で、宗教家はどうかあるべきかについて、ご提言をいただければありがたいと思います。

○清水 難しい問題だなというのが正直なところですが。ただ、理想を理想として持たない限りは絶対に前には進まないで、理想を手放すことはまずあり得ないというところがスタートかなと思います。

その上で、確かに今ウクライナが反転攻勢をしているということをもって、その対応が正解だったのかという判断はすごく難しいと思います。もしかしたらこの後、ウクライナが強力な軍事国家になってしまつて、他の国に侵略するとう可能性がないわけではありませんので、答えを出すには早過ぎるのではないかと思います。

○伊勢崎 宗教界の皆さんが武器のことを語る上で、一つ頭の片隅に入れておいていただきたいのは、例えば、近代的なマシンガン、自動小銃を使わなくても、大量破壊兵器以上の殺傷能力を示せる例が近代で起こっていることです。

ルワンダではたった百日間で百万人が、近代的な兵器は何一つ使われず亡くなりました。民衆がこの民族を、この敵を根絶やしにしないと、自分たちの子どもに未来はないと思つてしまつたら、それだけで武器は使わなくても、大量破壊兵器以上の殺傷能力を示してしまいます。暴力というのは必ずしも、武器の使用だけではないということを頭に入れていただきたいということです。

ウクライナの例をとつて日本の軍備増強、抑止力を持つといった話になってしまいます。さきほど、ポーダーランドのお話をしましたが、緩衝国家としての判断をわれわれはしなければならぬと思います。なぜかと言うと、われわれの仮想敵国というのはロシアだけではな

くて、中国、北朝鮮もあるからです。もし日本が有事になったら、海のかなたのアメリカ本土ではなくて真つ先に日本が戦場になることをいかに真摯に考えるか。

ウクライナ戦争でもう一つ初めて起こったことがあります。それは原子力発電所が通常戦争の戦場になつたことです。これからどういふ予防措置を取るかという国際条約が出てくると思います。日本ほど、こんな細長い国土の海岸線状に原発を並べた国はありません。これに對して日本は何も対策をしていません。

○清水 もし、本当に暴力的な問題を考えるのであれば、まずやめなければならぬのは原発です。本当に攻められると思うのだったら、軍備を増強する前に原子力を全部解除するところからスタートする必要があるのではないかと思つています。



## 五・平和構築を目指して

○満井 次に、戦時教学の話題に転換したいと思います。戦時教学に対して言えば、例えば、平和教学とでも語り得るものができらるうかというようなことを徳永寮頭和上からご提言いただければと思います。

○徳永 この問題につきまして、まず頭に浮かぶのは浄土真宗の根本経典である『仏説無量寿経』に出ている「兵戈無用」、仏さまの慈悲の行き渡ったところには武器は要らないという言葉です。しかし、仏が遊履するところには武器は要らないといくら叫んだところで戦争がなくなるわけではないので、どのように現実に適用させていくかということが浄土真宗の大きな課題です。

浄土真宗では、私たちの救いの問題、信心は一人ひとりのしのごの問題、後生の一大事の問題であるとして、社会性が欠落していた部分があったといえる側面

があります。それに反発して、アメリカの浄土真宗では社会性を強調し過ぎるところがある。これに対して、後生の一大事の問題と社会的な問題をどう融合させていくかということが現代の一番大きな課題です。二つの間に架け橋がないというところが一番大きな問題で、これからそういうことを追求していきたいと思っています。

先生方のお話を聞いて、まさしく社会性の問題でありまして、それをどのよう

に浄土真宗の教えと融合させていくか。そうしないと浄土真宗は社会から取り残されてしまうという恐れを感じるということが今日、私の強く感じたところでございます。

○満井 質問用紙の中に「どういう状態をもって平和と考えたいのだろうか」というご質問があります。真つ先に思い浮かんだのは、ノルウエーのガルトゥング氏の積極的平和が思い浮かびますが、われわれが目指す平和をどう想定していったらいいか。これを両先生にお

聞きしたいと思います。

○清水 平和の状況は、かなり主観的なもので、正直、定義できないと思っています。そのため、「この状態が平和です」と他の人に強要することは平和ではないのではないかと思っています。何か平和と言うと、どうしてもすごい大きな話のような気がするんですけども、例えば、本願寺派の皆さんがいてもらって、誰かが本当に助かったなと思ってもらえるだけでも平和という活動の一つになると思います。それを逆にこうすることがいいことです、というやり方ですと、どうしても他の人に干渉してしまう、入り込んでしまつて、その人の内側の安寧みたいなものを壊してしまうのではないかと思います。

ただ、その前提として絶対的に考えないといけないのは、まずいのちを守るということ、それだけは戦争という文脈で言った場合には絶対的に必要だと思えますので、そこから先は今度関係がどうできていくかという話の中で、平和という

のが出てくると思っています。

○伊勢崎 非常に難しいです。日本は、北朝鮮、中国、ロシア、ウクライナ、アメリカも批准している通称「ジェノサイド条約」、大量殺人を防止する条約に批准していません。例えばジェノサイドは、本当に平時に一日で起こります。ですから、特に日本は、今この戦争を契機として戦時と平時の区別なしに、これはやっではないけないということを普遍的に持たなければいけないと思っています。

その一つが「ジュネーヴ諸条約」の基本中の基本の考え方だと思います。それは敵国の人間だから殺すとか、人権がないとか、何々に属するからこうだとかという、いわゆる集団懲罰の厳禁です。これに対して恐ろしくわれわれは不感症になっています。いわゆる経済制裁がありますが、われわれはロシア民衆のことを考えていません。いわゆる平時とか戦時でも関係なく起こる集団懲罰という考え方を主流にしてはいけないと信念として思っています。

○清水 集団で決めつけられてしまうというところですね。自分と関係のないところで勝手にその集団に入れられて、「あなたはその集団の人間だからこうですよね」と勝手に理解されてしまうというのは、すごい暴力的だと思います。やはり、暴力というのがポイントになってくると思います。

## 六. 宗教者への期待

○満井 両先生に一言ずつお願いしたいのは、宗教家に、あるいは本願寺派に何を望まれるか。何を期待しておられるかということですか。

○清水 例えば、ロシア正教の中にも今のままでは駄目だと思っている方もいらっしゃると思います。他にもイスラムでもそうだと思いますし、いろいろな宗教に関わる人たちの中でこのままでは駄目なのではないかと思っている方もいらっしゃるはずです。そういう方々に向けて、本願寺派には過去を反省して、そ



のことに基づく活動があるということについて発信していく。それでロシア正教の方向が変わるとは思わないですが、きつと届くのではないかと思います。ですから、戦時教学の話を国際的なところでどんだん発表していくというのは、つらいこととは思いますが、そういうことを通して、世界全体の宗教者の方々にメッセージを伝えていくというのは、西本願寺にしかできないことなのではないかと思っています。

○伊勢崎 二〇〇八年、二〇〇九年あたりからタリバンの穏健派の人たちと交渉、接触を始めましたが、その支援をしてくれたのがWCRP（世界宗教者平和会議）です。そのときはやはり宗教界の持つ底力、本当に窮地に陥ったときに、最後の頼みの綱として宗教界のチャンネを使うということは、やはりすごいなと思いました。

清水先生が言われたように本当に懐の深さです。異なる宗教も含めて、同じ宗

教者として懐深く、ネットワークを何とか平時において維持してもらいたいです。願わくば、こういった催し、戦時教学、平和教学というテーマも含めて、何かフォーラムを維持することが重要だと思います。

（浄土真宗本願寺派総合研究所  
教団総合研究室）

## 閉会 座長代理あいさつ

総合研究所 副所長（所長職務代行）

満井 秀城

丘山前所長の急逝に伴い、私が座長代理というかたちで最後に御礼のあいさつを申させていただきます。

このたびは貴重な時間を清水先生、

伊勢崎先生はもとより、徳永寮頭、そして、総局の皆さま方、内局の皆さま方、宗務所の重要なポストにおられる皆さま方、ありがとうございました。

どうぞ宗務所内では、このたびの知見を基に、さまざまな宗務・宗政においてご活用いただけたらと思います。甚だ簡単、粗辞でございますけれども、一言御礼のあいさつとさせていただきます。本日はありがとうございました。